

神話「天孫降臨」

(天照大神の孫、瓊々杵尊(ににぎのみこと)とその降臨にまつわる神話)

(要旨)

日本最古の現存する歴史書である古事記によると、日の神の天照大神は、この地上界(水穂の国)を統治するために孫である瓊々杵尊を送ったとされています。瓊々杵尊は3つの贈り物、宝石、鏡、剣をたずさえていました(これは、のちに三種の神器とされます)。瓊々杵尊とその一行は、高天原から高千穂の久士布流多氣に天降ったと記されています。降臨の後、瓊々杵尊は、ここを素晴らしい土地と認め、立派な住居をかまえました。現在、くしふる神社のある、くしふるの峰の一つが天孫降臨の峯であると信じられてきました。神道信仰によれば、日本最初の天皇は、瓊々杵尊の曾孫であるとされています。

=====

太陽の神の天照大使の孫、瓊々杵尊

高天原の主宰神である天照大神は、地上界を眺めて大混乱が起きていると考えていました。天照大神は、まず地上界を平定させるために神々を送りました。混乱と困難を回復するために長い時間がかかりました。ついに秩序は整い、天照大神は「我が子、アメノオシホミミノミコトよ、あなたがこの国を治めなさい。」と言いました。ところが、アメノオシホミミノミコトは、自分は結婚をして子どもが生まれたと伝えました。瓊々杵尊という息子を見せ、自分の代わりにこの子を地上統治のために降臨させるのが良いと提案しました。天照大神は、その孫を見つめ、納得しました。

「天孫降臨」瓊々杵尊が天降った

そうして瓊々杵尊は、高天原から天降る準備をしました。瓊々杵尊が出発する前に天照大神は3つの神聖な品を瓊々杵尊に授けました。それが、天照大使を岩屋戸(英語では洞窟と表記)から誘い出した際に使った宝(八咫瓊勾玉)と鏡(八咫鏡)、そして素戔嗚尊が大蛇の体内(尾)から見つかって、姉である天照大使に託した神剣(草薙剣)です。これらが、のちの三種の神器となります。

天照大神は鏡を取り、これを私の御霊であると思い大切に敬い祀るように、そして御心に従い地上を治めるよう命じます。こうして瓊々杵尊は、三種の神器をたずさえ、高天

原から天降りました。一行は、筑紫国（現在の福岡で古代日本の国）日向の高千穂、久士布流多氣に天降ったと書かれています。到着後、瓊々杵尊は、ここを素晴らしい土地であるとし、高くそびえる太い柱と垂木の立派な宮殿を建て、そこに住みました。

瓊々杵尊を祀るくしふる神社は、その一行とともに天降りしたと信じられている峯に1694年に創建されました。それ以前は、この峯自体（現在のくしふるの峰）を神の住処とし、神聖なものとして崇拝していました。神道信仰において、瓊々杵尊の曾孫は日本の最初の天皇となり、そしてその神話の中で、瓊々杵尊を通して日本の皇室の起源を辿ることができます。

「高千穂」の由来

神話が伝えられると共に、高千穂には、もう一つ瓊々杵尊降臨にまつわる伝説があります。伝説によると、瓊々杵尊と一行が高天原から降りてきた時、先を見通すことのできない霧に覆われ、道を見失ってしまいました。その時、この地に住むオオクワとオクワという二人が現れました。そして瓊々杵尊が手に持たれている稲千穂を刳にして、あたり一面にまかれるようにと進言しました。すると霧は晴れ、瓊々杵尊と一行は、無事に地上界に降りることができました。

高千穂という名前の神話での由来は、瓊々杵尊が蒔いたたくさん（日本語：千“CHI”）の稲穂（日本語：稲穂“INAHO”）に尊い（日本語：高“TAKA”）という意味の高をつけて高千穂とするものです。国見ヶ丘の麓にある銅像がこの伝説を伝えています。